おおさか人物百科

与謝野晶子 ❶

六男六女を産み 仕事に社会運動に大活躍

私は女子短大に勤めていたころ、学生たちから「尊敬する女性は」と聞かれたら、即座に与謝野晶子だと答えていました。明治から昭和初期にかけて、こんなに素晴らしい女性は、他にはおりません。12人の子どもを産み、11人を立派に育てあげた、これだけでもたいしたものです。

彼女が23歳で与謝野鉄幹と結婚してからの出産記録は、次のとおりです(年齢は晶子)。

24歳　長男光
26歳　次男秀
29歳　長女八峰・次女七瀬
31歳　三男麟
32歳　三女佐保子
33歳　四女宇智子
35歳　四男アウギュスト
37歳　五女エレンヌ
38歳　五男健
39歳　六男寸(生後死亡)
42歳　六女藤子

もちろんレンジでチンの時代ではない。電化・ガス製品や、紙おむつにミルクなどあるはずはない。八峰・七瀬の双生児が生まれたころは、胸と背に二児をかかえ、両手に長男・次男をぶらさげて買い物にでかけ、七輪をパタパタあおいで湯をわかし、あかぎれだらけの指でおむつを洗う毎日です。さらに経済能力のないぐうたら亭主鉄幹を支え、次々に芸術的香気を放つ短歌を詠む。女子教育に力を入れ、女性解放運動にも参加、おまけに『源氏物語』はじめ古典の現代誤訳に多大の業績をあげている。これはもう人間わざとは思えません。

今号から少し長くなりますが、彼女の生涯をたどるので、とりわけ若い女性の皆さんに、私たちはどう生きるべきかを考えるきっかけにしてもらえたら、筆者としては大満足です。

晶子は明治11年(1878)12月7日、堺の甲斐町の菓子匠鳳宗七の三女に生まれました。母は後妻の津祢で、父32歳母30歳のときの子どもで、本名は志よ(ち)うといいます。後に彼女は

我の名に太陽を三つ重ねたる
親ありとしも思はれぬころ

と詠んで、本名は晶(しょう)だといっていますが、これは「志よう」に自分で「晶」の漢字をあてて飾ったつもりです。

曾祖父が始めた菓子匠 大店の三女として誕生

晶子の曾祖父鳳宗助は鳳村(現・堺市南部)の出身で、若いころ大坂に出て淡路町にあった有名な菓子商「駿河屋」に奉公、主家に認められてのれんを分けてもらい、心斎橋筋に店を構えます。彼の次男初代宗七(祖父)は堺に駿河屋支店を起こし、洋酒を混ぜた菓子など考案して好評。その次男二代宗七(父)が店を継ぎ、とくに小豆を散らしたようかん「夜の梅」がヒット商品になり繁昌、さらに和菓子やワインも並べて菓子では堺一の大店(おおだな)になりました。

二代宗七の母(祖母)静はなかなかの女丈夫で、宗七の兄が文芸・風流に凝って店の経営に向いていないとみるや、さっさと隠居させ、次男の宗七を当主にしたほどのやかまし屋です。宗七の最初の妻(名前不詳)が気に入らぬ。おっとりとして上品だが、店をとりしきる力はないと「てる」「はな」の二人の娘が生まれていたのに離縁させ、捜しまわって働き者の津祢をみつけて、後妻に迎えています。

二代宗七と津祢夫婦には、長男秀太郎、次男玉次郎(二つで死亡)、次が晶子、三男籌三郎、最後に里の五人の子が生まれます。

このなかでとびきり学問ができたのは秀太郎で、後の東京帝国大学教授になり、電気工学では海外にも知られた科学者です。彼は妹の晶子をかわいがりますが、鉄幹が大嫌い。妹がとびだして東京の鉄幹のもとへ走ってからは兄妹の縁を切り、父宗七の葬儀のおり子どもをつれてかけつけた晶子に参列もさせず、罵倒して追い返しています。

駿河屋を継いだのは弟の籌(ちゅう)三郎(さぶろう)です。彼は姉晶子と大の仲良しで、兵役にとられて日露戦争の旅順攻撃に参加したおり、弟を心配して詠んだ詩が、大変な物議をかもしたあの有名な「君死に給ふこと勿れ」です。

おおさか昔ばなし 297

文　三善　貞司(地域史研究者)
切り絵　塩入　みや子

おおさか人物百科 (149)

与謝野晶子 ❷

読書、作文が好きな晶子 高女では理数系にも才能発揮

明治11年（1878）12月7日、晶子が生まれたとき父の鳳宗七は、「なんや、女の子か」と顔をしかめました。前妻との間に、てる・はなの二女がおり、後妻の津祢（つね）は秀太郎・玉次郎と男子を続けて産みましたが、玉次郎が早世したため、ぜひもう一人ほしいと思っていたからです。そのせいか晶子は男の子の服装で育てられます。

十二まで男姿をしてありし我とは君に知らせずもがな

後に彼女はこう詠んでいます。「父に好かれていない」、敏感な晶子は、幼女のころからこう思い込んだようです。

堺の宿院小学校に入学、同級生に今では「日本のチャップリン」と呼ばれる喜劇役者曾我廼家五郎（本名和田久一）がいました。彼は「鳳さんふくろう　ほうほう　ほう」とはやしたてて、彼女の髪の毛をひっぱったそうです。

父宗七は学問に熱心で、8つになると漢学者樋口朱陽の塾に通わせます。ここで論語や白楽天の漢詩を学び、あなかしこ楊貴妃のごと斬られむと思ひたりしは十五の少女との詠歌が残っています。『長恨歌』を習ってロマンに酔う少女の面影が、よく出ています。

読書・作文の大好きな彼女の学業成績は普通で、堺高等女学校（現・府立泉陽高校）に進学したいと言ったとき、担任はびっくりして、無理、無理と手をふったそうです。ところが見事に合格、成績も向上しとくに数学・理科が抜群にできました。

父宗七は堺一の菓子店「駿河屋」を経営しています。これは便利と晶子に帳簿をつけさせたところ、難しい税務経理まですらすら片付ける。母違いの姉てるは早く竹村家に嫁ぎ、次姉はなは早世したので、晶子は母津祢を助けて家事も手伝わねばならず、忙しいときは学校も休まされました。そのかわり少しでも時間があると、父の目を盗んで蔵書をむさぼり読む。宗七は商人ですが文学、とりわけ古典に興味があり、書斎には小さな図書館ぐらいの書物が積まれています。

「東京で勉強したい」――堺の短歌サークルに加入

なかでも晶子は『源氏物語』が気に入りました。といっても今のように訳本があるわけじゃない。それで『湖月抄（こげつしょう）』（江戸時代の注釈書。北村季吟著）を参考にして読んだそうで、大変な学力の持ち主です。源氏が読めれば、『枕草子』や『更級日記』『伊勢物語』は簡単だ。独学で女学校の国語教師も顔負けするほどの、古典の教養を身につけていきます。

現代文学にも興味を持つ。森鷗外の「めざまし草」、島崎藤村らの文芸雑誌「文学界」も読みはじめ、「電燈は夜の12時に消えた。それまでふとんをかぶって読みふけった。樋口一葉の『たけくらべ』『にごりえ』を読んだときは、体が熱くなるほど感動し、若い女も文学をやる時代になったのだ、私も東京へ行こうと思った」と書いています。

女学校を卒業した晶子は母に、「お兄ちゃんのように東京で勉強したい」とねだりました。しかし母は、いつも木で鼻をくくるような調子で、「あきまへん、男と女はちがいます。あんたは勉強せんでよろし」と言い続けました。

こうして卒業後も店の経理を手伝っていましたが、明治27年こっそりと「文芸倶楽部」に投稿した短歌が入選し、掲載されたのです。

露しげきむぐらが宿の琴の音（ね）に秋を添へたる鈴虫の声（「むぐらが宿」は貧しい家）

これが初めて活字になった彼女の短歌で、16歳の作です。嬉しくてたまらぬ晶子は、母の反対を押しきって翌年、強引に「堺敷島会」という堺にあった短歌サークルに加入しました。

時鳥（ほとときす）鳴く一声に雨晴れてあや珍しき三日月の影

小倉山ふもとの里はもみぢ葉の唐紅（からくれない）の時雨降りたり

などを会誌に発表します。

おおさか昔ばなし 298

文　三善　貞司（地域史研究者）
切り絵　塩入　みや子

おおさか人物百科 (150)

与謝野晶子 ③

鉄幹の歌に目から鱗 浪華青年文学界に参加

明治30年（1897）晶子19歳）、東京帝国大学在学中の兄秀太郎が送ってくれた読売新聞（当時文芸欄に力を入れていた）が、晶子の文芸観、いや、人生を大きく変えるきっかけとなります。

新聞には聞いたこともない与謝野鉄幹という青年が

春浅き道灌山の一つ茶屋餅食ふ書生袴つけたり

などの、今までは歌材にならなかった十数首の歌を発表していたのです。それまでの晶子は、花鳥風月（自然の美しい風景）を詠む江戸時代以来の伝統的情緒が、短歌の世界だと思い込んでいました。

「実に無造作だ。技巧など要らない。これなら誰にでも詠める」

晶子は目から鱗がとれたような気がします。これが彼女が初めて鉄幹の名前に出会ったきっかけでした。

この年、堺に電話局が誕生します。夜間の交換手（かけるほうから相手の電話番号を聞き、コードを差し込んで通話させる役）は、堺中学校（現・府立三国丘高校）の苦学生（働いて学費を得る生徒）森崎富寿（とみひさ）で、昼は通学、夜も休まず仕事にがんばる健気な姿が、写真入りで新聞に出ました。感動した晶子は、「よくせべなきたなし小舟」との匿名で、激励の手紙を出します。

「さはらば消えむ露の玉づさおぼつかなくも しめしまゐらせ候…」

で始まる文章と、あの晶子独特の細いみみずが這ったような細い筆の文字を見て、富寿は仰天します。長い巻紙の最後まで、なにが書いてあったかは、さっぱり彼には理解できなかったそうです。これが初めて晶子の書いたラブレターです。つまり勝手に空想して理想の男性像を作りあげ、それに恋するタイプの女性でした。これは鉄幹を恋したときも同じです。

またこの年には、大阪に小林政治（実業家）、中村吉蔵（作家）、高須梅渓（評論家）を中心に、大阪では最初の文学結社「浪華青年文学界」が誕生、堺にも河井酔茗（すいめい）、河野鉄南らが集まってその支部が結成されました。晶子は父宗七の猛反対を押しきって、支部に参加します。

やは肌の熱き血潮に— 青年僧 河野鉄南への恋心

河野鉄南は、堺の覚王寺の住職河野桂仙の子どもで本名通該（つうがい）、少年時代から鉄幹の親友でした。鉄幹は大阪市の安養寺（住吉区）の住職安藤秀乗の養子になっていた時期があり、秀乗は桂仙と親しかったから、よく少年鉄幹をつれて覚応寺に遊びに来ており、同年代の鉄南と鉄幹は仲好しになりました。2人とも詩歌が好きだったので、

「ぼくは本名の寛の上に鉄をつけて鉄幹、きみの寺は南にあるから鉄南にしろ」

と鉄幹は主張して、ともに鉄の号をつけます。「鉄」は鉄のように堅い友情のシンボルです。

おおさか昔ばなし 299

文 三善 貞司（地域史研究者）
切り絵 塩入 みや子

鉄南は晶子より4つ年上、色白の無口で真面目な青年僧です。男性とのつきあいを許さなかった父宗七も、「覚王寺の若ぼんやったらまちがいない」と許してくれたから、晶子は彼に短歌の添削を乞います。そのうち例の空想癖がつのり、会合で会えばほとんどことばをかわさないのに、3日に一度のわりあいで手紙を出します。晶子の自宅から覚王寺までは歩いて10数分の距離ですから、これは異常です。内容も激烈で、有名な、

やは肌の熱き血潮にふれもみでさびしからずや道を説く君

は、鉄南にあてた恋歌です。

また晶子は詩も書きだしました。浪華青年文学会の機関紙「よしあし草」に、「鳳小舟（ほう）」のペンネームで発表します。

別れて永ききみとわれ
今宵あひ見し嬉しさを
汲みても尽きぬうま酒に
薄くれなゐの染めいでて
君が片頬にびんの毛の
春風やはくくろよぐかな

島崎藤村の詩にそっくりですね。なお戦争で堺はひどい被害を受けましたが覚王寺は無事で、往時の風情をとどめています。

おおさか人物百科 (151)

与謝野晶子 4

7歳で一家離散の鉄幹、独学で女学校の国語教員に

明治33年（1900＝晶子22歳）与謝野鉄幹は、短歌革新雑誌「明星」を創刊。女性の歌人が少ないので紹介してほしいと、親友の覚応寺（堺市）の河野鉄南に頼みます。鉄南はさっそく晶子を推薦しました。同誌2号に彼女の、

肩あげをとりて大人になりぬると告げやる文のはづかしきかな

が掲載されています。

ここで鉄幹についてお話します。彼は明治6年2月京都市岡崎の「願生寺」住職の与謝野礼厳（れいごん）の四男に生まれました。本名寛。父礼厳は京都府与謝郡加悦村の出身で、倒幕運動にも参加していますが、明治維新後は出家し、同寺の住職になりました。学問を好み和歌が上手、生涯約3万の歌を残します。のちに鉄幹は父の十三回忌供養に630首を選び、『礼厳法師歌集』を自費出版しています。

しかし礼厳は医薬品の開発や療養所を設立して福祉活動に力を入れ、現実より夢を追うタイプ、活動費を作るため鉱山事業に手を出して大失敗、ついに檀家から預かった金を使い込み、寺から追放されました。一家は離散し7歳だった鉄幹は、安養寺（大阪市住吉区）の住職安藤秀乗の養子にやられます。

ありし日は破れ衣に継ぎあてて乞食法師と人の見し父

これは鉄幹が父を詠んだ歌ですが、貧乏のどん底にいたことがよく分かります。

個性の強すぎた鉄幹は、養父と大げんかをして寺をとびだし、やはり養子にやられていた3人の兄たちの養家を転々とするうち、独学で教養を身につけ、父の才能を継いだのか誰も詠まなかった独特の短歌を作るようになります。

明治22年（鉄幹21歳）鉄幹は次兄の赤松龍麿が住職を努める山口県徳山市の徳応寺を訪ね、同寺が経営する私学白蓮女学校の国語科教員になります。ここで卒業生の浅田サダと恋愛し、女児ふき子が生まれるが生後1カ月で死亡したことから浅田家の両親と不仲になり、サダと別れます。ところがすぐに、今度は生徒の林滝野と愛しあい同居、物議をかもしました。

「恋をせねば歌は詠めぬ」自我の発現―『明星』創刊

林家は土地の資産家で娘3人、父の林小太郎は養子になるなら結婚を認めようと言いますが、大言壮語型の鉄幹は田舎に住んでも面白くない、東京に出て文学者になると拒んで上京。翌年落合直文（国文学者）の「浅香社」に参加、「二六新聞」の記者になって生活の資を得ながら、痛烈に旧来の和歌を攻撃し、花鳥風月に代わる革新的な短歌運動を始めました。

彼を蛇蝎（へびとさそり）のように嫌う人も多かったが、この無鉄砲な若者はカリスマ的人気を集め、同29年『東西南北』『天地玄黄（げんおう）』等の刊行した詩歌集は予想以上に売れ、同32年には前衛的な文学集団「東京新詩社」を設立、会誌「明星」を創刊します。

「短歌は我が心の燃ゆるままを歌ふ。我流の歌、自我の歌でなければならぬ。約束ごとや基準は一切不要。人生を赤裸にさらすことをよしとする」

「恋をせねば歌は詠めぬ。ゲーテやバイロンの如き恋こそ、真の自我である。恋を邪なりと閉じ込める暗い日本の窓を開き、さわやかな朝日を入れることが、詩人の義務だ」

「掛詞（かけことば）、縁語、枕詞（まくらことば）などにあけくれる老人趣味から、短歌を奪回するため明星は生まれた」

こう叫ぶ明星創刊号は、たったのタブロイド版14頁、定価6銭の小雑誌です。参加した晶子は発行資金に18円も寄付しています。これは大変な額です。もっとも費用の大半は、娘かわいさのあまり林小太郎が出しており、発行人は林滝野名義でした。

「養子縁組みを承知しなさい。明星が軌道に乗るまで、私が援助してあげるから」

小太郎の好条件も鉄幹は聞く耳を持たぬ。ひとりでやると拡大運動を始め、大阪に来て晶子と運命的な出会いをしたのです。

おおさか昔ばなし 300

文　三善　貞司（地域史研究者）
切り絵　塩入　みや子

おおさか人物百科 (152)

与謝野晶子 5

鉄幹、登美子との出会い―「われはつみの子になり申候」

明治33年（1900）8月、与謝野鉄幹は創刊した「明星」の同人募集のため来阪、北浜の平井旅館に宿泊します。親友の覚応寺（堺市）住職河野鉄南は、晶子をつれて訪れました。

彼女は銀杏返しの髪、紺がすりの単衣、紫繻子の友禅に合わせ帯。鉄幹は白がすりの着物に黒い絽の夏羽織、長身で細身。初めて出会った印象を後に晶子はお坊さんみたいと語っています。

「山川さんを紹介しよう」

初対面のあいさつもそこそこに鉄幹はこう言って、隣室から山川登美子を呼び寄せます。

「いつもお歌を拝見していますので、初めてお会いしたような気がしません。これからはお姉さまと呼ばせてください」

ずばぬけてきれいな美少女タイプの登美子が、深々と頭を下げたので、晶子はドギマギします。ときに鉄幹27歳、晶子22歳、登美子21歳の出会いでした。

それから鉄幹は2週間大阪に滞在しますが、晶子は5回、登美子は6回も会っており、8月6日には浜寺の寿命館で3人だけの歌会を開いています。

紫の襟に秘めずも思ひ出し君
ほほゑまば死なむともよし　鉄幹

松多き高師の浜のまさご路に
わが反故歌を埋めて往になむ　登美子

師と呼ぶを許し給へな紅させる口にていかで友といはれむ　晶子

また8月9日、3人は住吉大社に参拝。

新しく開きましたる歌の道に
君が名呼びて死なむとぞ思ふ　登美子

星の夜の無垢の白衣かばかりに染めしは誰がとがにおぼすぞ　晶子

などと詠みます。まるで恋歌のオン・パレードですね。

手紙好きの晶子は鉄幹に、猛烈なラブレターまがいの手紙を出し続けます。また河野鉄南にあてた有名な「つみの子手紙」も書いています。

「あなた様のこころよきますらをぶりの御文に　われは今何もつつまず申上べく候　われはつみの子に候　与謝野様に介し給ひしは　あなた様に候　つみの子になりしも　それにもとづき候　高師の浜かげにささやき受けしより　われはただ夢のごとつみの子になり申候　昔の兄様さらば　この夕べ…つみの子」

3人での京都紅葉見物 晶子の一生を決めた一泊

鉄幹への押さえがたい恋心を鉄南に打明けた手紙ですが、理性ではどうすることもできない燃えあがる炎のような乙女の気持ちに、胸が熱くなります。

しかし鉄幹は徳山にいて、返事どころではありませんでした。妻の林滝野が萃と名付けた男の子を出産したからです。前回述べたように滝野の父林小太郎は徳山の資産家で、鉄幹が刊行した「明星」の発行資金も援助、そのかわり林家のむこ養子になるよう、再三説得します。ところがのぼせあがった鉄幹は、徳山にひっこもるつもりはさらさらない。ついに小太郎と鉄幹は大げんかになり、資金はいらぬ、滝野も嫌いだと啖呵を切ってとびだしました。なお滝野は後に萃をつれて3歳年下の詩人正富汪洋と再婚します。彼は若山牧水らと活躍した文人です。「鉄幹さんは萃はかしこい。いい子だ。父より偉くなると言って出ていきました」、滝野はこう語っていますが、鉄幹はひどい男ですね。

同年11月、徳山から東京へ戻る途中、鉄幹は京都で下車し、登美子と晶子を呼び出して、京都の永観堂の紅葉見物にでかけ、粟田山の旅館「辻野」に一泊します。

三たりをば世にうらぶれしはらからと我まづいひぬ西の京の宿

晶子の詠歌ですが、この一泊が彼女の一生を決定づけました。ただし鉄幹は気性の激しい晶子よりも、色白で控えめな登美子のほうが好きで、二人の楽しそうな笑い声に晶子はジェラシーをいだき、ヒステリー気味だったといわれます。

おおさか昔さや話 301

文　三善　貞司（地域史研究者）　切り絵　塩入　みや子

おおさか人物百科 (153)

与謝野晶子 6

晶子のライバル 山川登美子 鉄幹への想いを秘め、許嫁と結婚

話題を変えて晶子のライバル山川登美子を紹介します。

彼女は明治12年（1879）福井県小浜の銀行家山川貞蔵の4女に生まれました。本名とみ、号は白百合、晶子よりひとつ年下、弟にプロレタリア作家として知られる山川亮がいます。

父貞蔵は英語教育に熱心で、当時英語教育では有名だった大阪の梅花女学校に進学させます。ここで登美子は学校長の成瀬仁蔵（女子教育の恩人＝後に日本女子大学を創設）になみはずれた歌才を認められ、卒業後鉄幹の「明星」の同人に推薦されました。ですから晶子よりは早い加入で、白百合のペンネームで秀歌を発表、鉄幹はじめ男性同人たちは、彼女をマドンナのように大事にします。

前号でふれた明治33年11月の永観堂紅葉見物の服装は、「えび茶袴と白がすりの着物、靴をはき長い豊かな髪に大きなリボンをつけ、「いかにも良家の子女タイプ」だったそうで、おたいこを締め束髪に結った彫りの深い顔だちの晶子も、「まあ、きれい」と思わずみとれたそうです。気のせいか鉄幹は登美子と話すとよく笑ったので晶子は嫉妬し、登美子なんかに鉄幹をとられてたまるかとカッカとなったといわれます。

ところが、紅葉見物の10日後、登美子は突然堺の晶子の実家を訪れ、「小浜に帰ってフィアンセと結婚します。お世話になりました」と、深々と頭をさげたのです。驚いてよく聞くと、幼いころから彼女には親の決めた親族のひとり山川駐七郎という許婚者がおり、年内に挙式の手はずが進んでいてどうにもならないとのことでした。

「おめでとう！でもお名残惜しいわ」

と言いながら、晶子は天にも昇るような気持ちになります。

「白百合のきみ　けふとひ給ひき　あす帰国し給ふとなり
高まげにていとどねびまさり給ふやう　美しくおはしき　同じ姿にて百合持ち給ふ写真　もたらし給ひき」

彼女はこう書いています。このときの登美子の歌が、

それとなく紅き花みな友にゆずりそむきて泣きて忘れ草摘む

です。まさに名歌です。

髪長き少女と生まれ白百合に額は伏せつつきみをこそ思へ

との歌もあり、登美子もまた心の中では鉄幹を愛していたことが、よく分かります。

清楚哀婉な短歌を残し 30歳の若さで病没

その後の登美子の短い人生を記しておきます。わずか2年の結婚生活で、夫の駐七郎は病死しました。明治37年上京し日本女子大学に入学、鉄幹・晶子夫妻と再会し「明星」に復帰、清新な短歌を次々に発表、晶子も負い目を感じていたせいか全面的に応援し、翌38年登美子と増田雅子を誘い、3人で共同歌集「恋衣」を刊行、評判になります。登美子は白百合と題して131首を発表、生前の歌集はこれだけです。なお大学は、学生のくせに恋歌を詠むとはけしからぬと、登美子と雅子を停学処分にしています。おそろしい時代ですね。

しかし美人薄命は世の常です。晶子に優る浪漫派歌人と絶賛された登美子は、夫駐七郎から感染した結核が悪化し、京都の姉の嫁ぎ先に寄寓し療養生活に入ります。「微熱白燈のやうに点る」、彼女は苦痛をこう書いていますが、全身ひどい倦怠感に包まれ発熱する美しい横顔は、雪女のように妖艶でした。

我が死なむ日には斯く降れ京の山白雪高し黒谷の塔（金戒光明寺の文珠塔のこと）

帰り来む御魂と聞かば凍る夜の千代も御墓の石抱かまし

などの秀歌を詠み続けた登美子は、同42年4月、

矢の如く地獄に落ちる躓きに石とも知らず拾ひぬるかな

を残して絶命します。まだ30歳の若さでした。

「晶子奔放華麗　登美子清楚哀婉」

2人の短歌の質の違いを、文芸評論家たちはこう記しています。

おおさか昔さがし 302

文　三善　貞司（地域史研究者）　切り絵　塩入　みや子

おおさか人物百科 (154)

与謝野晶子 7

明治34年（1901）＝晶子23歳

鉄幹28歳）1月、神戸の新詩社文学同好会に出席した鉄幹は、晶子を誘って昨秋山川登美子を加えて3人で宿泊した京都粟田山の辻野旅館に、今度は2人だけで宿泊します。

滝野と別れ、私と結婚して―資金、萃への未練…悩む鉄幹

このとき詠んだ短歌が、のちに刊行される晶子の最初の歌集『みだれ髪』の題名になる

黒髪の千すじの髪のみだれ髪
かつ思ひみだれ思ひみだるる

です。晶子がどんなに思い悩んだかは、この一首だけで十分理解できます。妻子ある男と老舗の商家の生娘が外泊するなど、人倫にそむくといわれた時代です。姦通罪という法律もあります。これはもう女ごころといったなまやさしいものではない。死んでもいいほどの気持ちだったことでしょう。別れた直後、

君さらば粟田の春のふた夜妻

またの世までは忘れ居給へ

との歌を、東京の鉄幹にあてた手紙にそえています。このあとも、

春の国恋の御国の朝ぼらけしるきは髪か梅花のあぶら
道をいはず後を思はず名を問はずここに恋こふ君と我見る

などと詠み、次々に手紙を出して早く林滝野と別れ、自分と結婚するよう迫っています。

これを知った父宗七は猛烈に怒り、ふしだらな娘を外に出すなと部屋に閉じ込め、外出禁止を命じて見張りまでつけます。

この姉を庇ったのが、弟の籌三郎です。慰め励まし文通の手伝いまでします。後に戦場に召集された彼を心配して詠んだ詩が、あの有名な物議をかもした「君死に給ふこと勿れ」です。

入籍していないとはいえ、鉄幹と滝野との離婚は、スムーズには運びませんでした。父小太郎の援助がなければ、「明星」の発行資金は底をつきます。いや、肝心の鉄幹が滝野との間に生まれた萃への未練が、長引かせたのです。鉄幹は晶子を才はじけた女弟子としてつきあいたい、ところが好きな登美子に去られたはずみで関係した、浮気性の男だから、本心はこうだったかもしれません。

怪文書「文壇照魔鏡事件」去る滝野、上京する晶子

そんな優柔不断な鉄幹を、「文壇照魔鏡事件」が襲います。鉄幹の女性関係のだらしなさを攻撃した匿名の怪文書がばらまかれた事件で、

「教え子と次々に関係をもち、資産家の林家をだまして明星の発行資金を出させ、今度は堺の豪商の娘を誘惑、重婚の大罪を犯しながら、資金集めに利用している」

との内容です。しかも中傷やデマを加え、恋愛至上主義、ロマン主義を唱える男の仮面をひっぱがすと、単なる女たらしではないかと大げさに書いたので、世間は大騒ぎになります。

若者たちにカリスマ的人気のあった鉄幹は、詩歌の革新を唱え保守派を痛烈に罵倒しただけに、敵も多い。ここぞとばかり鉄幹の人間性をたたいたから、明星の女性会員たちは眉をひそめて脱会してゆく。かっとなった鉄幹は、やけに晶子のことが詳しく出ているので、これは昔の仲間で今はライバルの「新声」を刊行している高須梅渓や中根駒十郎の仕業にちがいないと、いきなり2人を名誉毀損で告訴、裁判沙汰になります。結局証拠不十分で敗訴し、事件はうやむやで終わりますが、これにも相当の時間と費用を失いました。

いっぽう赤ん坊の萃を抱いて東京の鉄幹宅に押しかけていた滝野は、この騒動を契機に、鉄幹の大言壮語癖や、女性の弟子たちとはしゃぐ姿に、次第に違和感を覚えるようになります。彼女は冷静で理知的な性格です。いっときは女学校の恩師鉄幹に熱をあげますが、この人、あまり生活能力はないし、父が別れろ別れろと言うのも無理はないわ…と思いはじめます。

同年6月、鉄幹から滝野と萃が故郷の徳山に帰ったとの知らせを受け取った晶子は、今だと決心し鞄ひとつで上京します。

狂ひの子我に焔の羽かろき百三十里あはただしの旅

は、そのときの詠歌です。

二校学碑めぐり

大阪府立泉陽高校の中庭には、創立70周年記念行事(昭和46年)のひとつとして建立された「君死に給ふこと勿れ」を刻んだ碑がある。高校の前身は、晶子が卒業した堺女学校。

与謝野晶子文芸館 企画展

晶子さんのお宅拝見 開催中―9月11日(日)

8/27(土) 午後2時～学芸員によるギャラリートーク

関西から 文化力 POWER OF CULTURE

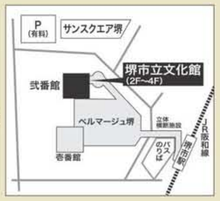
本展では、エピソードを交えて晶子さんが使っていた愛用の家具や食器など約50点を展示します。「情熱の歌人」としてだけではなく、生活者としての晶子さんに触れ、その幅広い活動の背景には、家族への思いと家族からの支えがあったことを知っていただく機会となれば幸いです。

ワークショップ 手作り和菓子体験 会場＝サンスクエア堺

晶子さんは子どもたちに手作りの和菓子を作っていました。家庭でもできる和菓子作り体験をしていただきます。

平成23年8月21日(日) 13:30～15:30
・講師＝橋本通子氏(管理栄養士、専門調理師、料理研究家)
・定員30名(先着順 事前申込み必要)
・参加費＝1,500円
(晶子館、ミュシャ館もご覧になれます)
・共催＝(財)堺市中小企業勤労者福祉サービスセンター

堺市立文化館 与謝野晶子文芸館
大阪府堺市堺区田出井町1-2-200 ベルマージュ堺弐番館
TEL.072-222-5533 JR阪和線「堺市」駅から徒歩約3分
開館時間：9時30分ー17時15分（入場は16時30分まで）
休 館 日：月曜日、休日の翌日(土日の場合は開館) 8月9日
入 場 料：一般500円、高・大生300円、小・中生100円
(小学生未満、65歳以上、障害者手帳をお持ちの方は無料)
＊アルフォンス・ミュシャ館もご観覧いただけます。



晶子と子どもたち(大正3年)
提供 日本近代文学館

おおさか昔ばなし 303

文 三善 貞司(地域史研究者)

※切り絵の塩入みや子さんは、体調不良によりしばらくお休みされます。

おおさか人物百科 (155)

与謝野晶子 8

明治34年（1901）晶子23歳鉄幹28歳）6月、堺の菓子商駿河屋の令嬢鳳晶子は鞄ひとつで家出、東京の与謝野鉄幹のもとに走りました。

鞄ひとつで家出、鉄幹のもとへ 初の歌集『みだれ髪』を出版

今ここにかへり見すればわが情闇をも恐れぬめしひに似たり

こう詠んで上京した彼女は、まず「明星」同人でいつも庇ってくれた栗島狭衣（大女優栗島すみ子の父親）宅を訪ね、鉄幹にとりついでほしいと頼みます。まさか晶子が来るとは思わなかった鉄幹は驚き、数日後多摩渋谷（東京都多摩市）の自宅に招きますが、手鍋さげてもどころか無一物で押しかけ女房になった晶子は、鉄幹の貧乏ぶりにびっくりしました。経済観念ゼロの彼は、収入と支出のバランスがとれず、好き放題に暮らすから家計は火の車、豊かな商家の娘とはあまりにもかけ離れた世界でした。

それでも鉄幹はなにもかも捨ててとびこんできた晶子に感動し、晶子の歌集を出そうと言いだします。それが彼女の愛情に報いる唯一の方法だと思ったようです。だが資金はない。鉄幹は無断で次号の明星発行資金を流用したから、同人たちは怒ります。元来鉄幹は自己中心的で勝手気まま、仲間の言うことなど耳にもとめません。それに妻子を追い出して情婦の晶子をひきこんだ道ならぬ恋だ、なにが恋愛至上主義だ、スキャンダルではないかと息まく者も出てきます。

狭衣は無論、主要同人で親友の窪田空穂、水野葉舟らも「それだけはだめだ」とひきとめるのを無視し、8月5日、発行資金を転用して晶子の第一歌集『みだれ髪』を出版します。縦長の小型本で138ページに399首収められた書物です。

歌集への賛否両論— 生活をささえ多忙な日々

夜の帳にささめき尽きし星の今を下界の人の鬢のほつれよで始まるこの歌集は、まず世間の好奇心を集め、評判になります。恋による女性の解放、因習に閉じ込められた性を太陽のもとにさらそうとする内容に、歌壇の大御所佐々木信綱は顔をしかめ、

「この娼妓夜鷹ばらの目にすべき乱倫の言ぞ。淫を勧めんとする不義徳義、あに以て美の高尚を為すべけんや。この書猥行醜悪、人心に害あり、世教に毒あり」

と酷評します。なかには高山樗牛のように、

「晶子の才能秀絶、歌詞高く情清く、風格具へたり」

とほめる者もいたが、インテリの大半はモラルのない不倫の書と軽蔑します。しかし、今冷静に振り返ってみると、この29年後に歌人斉藤茂吉が、

「早熟の少女が早口でものを言ふやうな歌風。天下を風靡し賛否両論喧しく、反発する者も眼の色は驚いてゐた」

と書いているのが、的を射ているように思います。ひところ俵万智の歌集「サラダ記念日」が、大変な話題になりましたね。あれと同じです。

あまり不倫、ふしだらと非難するので、上田敏（詩人・当時東大講師）が、

「恋情ひどいとけなすが、百人一首もそうではないか」

と、晶子を弁護しています。しかし若者たちは熱狂的に歓迎し、『みだれ髪』は売れに売れ、「明星」発行資金は回収されてお釣りがでる。会員希望者も増え、2百名にふくれます。

翌35年入籍が終わり、鉄幹・晶子は正式の夫婦になります。しかし生活は苦しく、連載①で記したように次々に子どもが生まれ、超多忙の毎日でした。

鉄幹は「明星」を編集・発行し、文芸講演にでかけてだぼらを吹いていればよいのですが、晶子はそうはいかない。炊事・洗濯・編物等の家事労働は、電化された現在とは比較にならぬ。紙おむつもミルクもない育児に疲労困憊しながら短歌を詠み文章を書いて生活費も稼がねばなりません。ぐうたら亭主鉄幹を支えるのも大変。堺の大店の令嬢には過酷すぎる毎日でした。

裏集『みだれ髪』初版表紙（デザイン：藤島武二）。晶子の本の装幀は美術的にも優れているものが多く、内容や雰囲気をよくあらわしています。

日常、小さなこどもたちに着物を引っ張られても胸がはだけないように、襟元が崩れないように縫い付けられている着物もあり、晶子の生活ぶりがよくわかります。

一見、与謝野家が裕福だと思われがちですが、子どもたちに普段おもちゃを買ってあげることもできず、晶子は着物や櫛などを売ってクリスマスにだけプレゼントを買っていました。

（文・森下明穂／与謝野晶子文芸館図録より転載）

資料提供：堺市立文化館 与謝野晶子文芸館
大阪府堺市堺区田出井町1-2-200 ベルマージュ堺弐番館
TEL.072-222-5533 JR阪和線「堺市」駅から徒歩約3分

文学碑めぐり

千里南公園（阪急北千里線南千里駅下車北へ3分）には、歌集『みだれ髪』の代表的な歌のひとつ、「やははだのあつき血潮にふれも見でさびしからずや道を説く君」が刻まれた歌碑がある。園内にはその他、万葉集や松尾芭蕉、小林一茶など16基の石碑があり、拓本採集が自由にできる。

緑豊かな公園は、家族連れやバードウォッチングを楽しむ人たちが散策している。

おおさか昔さがし 304

文 三善 貞司（地域史研究者）

※切り絵の塩入みや子さんは、体調不良によりしばらくお休みされます。

おおさか人物百科 (156)

与謝野晶子 9

明治37年（1904＝晶子26歳鉄幹31歳）9月、「明星」に発表した晶子の詩「君死に給ふこと勿れ」が、大変な社会問題になります。

戦場の弟を思う姉の詩が忠君愛国に背くと社会問題に

当時日本は国運を賭してロシア帝国と戦争中で、とくに軍港旅順に面した二〇三高地の攻防戦は熾烈をきわめ、バルチック艦隊が到着するまでに攻略せねば、日本の敗戦は一目瞭然です。将軍乃木希典は再三肉弾攻撃をくり返し、5万9千人の死者を出します。この攻撃軍に堺の生家「駿河屋」を継いでいる新婚早々の弟の籌三郎がいると聞いた晶子は、黙ってはおられなかったのです。

「あゝをとうとよ君を泣く
君死にたまふことなかれ
末に生れし君なれば
親のなさけはまさりしも
親は刃をにぎらせて
人を殺せとをしへしや
人を殺して死ねよとて
二十四までをそだてしや
人を殺せとをしへしや
人を殺して死ねよとて
二十四までをそだてしや」

で始まる長詩は、新妻の泣く姿を思いださせ、父は亡くなり残った白髪の母は、店ののれんはお前が死ねばどうなるかと、切々と訴えています。その中の、

「すめらみことは戦ひに
おほみづからは出でますね
かたみに人の血を流し
獣の道に死ねよとは
死ぬるを人のほまれとは
大みこゝろの深ければ
もとよりいかで思されむ」

とある部分が、忠君愛国に酔う人たちの怒りを買います。天皇陛下万歳と叫んで戦場で死ぬのが男子の本懐だとされた時代です。大町桂月（評論家＝明治時代の国民精神の象徴的存在）は、晶子を「乱心賊子」と呼ばわりますから、いきりたった国粋主義者たちは、恥知らずの国賊だ、たとえ女子なりともかかる不忠義裏な奴は、即刻始末するべしまで騒ぎたてます。

今度は晶子がびっくりしました。弟の安否を心配する姉の持ちを素直に表現したつもりでしたから次号で、

「たいさう危険なる思想と仰せられ候へども、死ねよ死ねと申せしこと、何事にも忠君愛国の文字や教育勅語を引用するこの流行は、かへって危険に候はずや。私の好きな王朝の書物に、人を死ねと申すこと書き散らしたる文、見当らぬやうに得候。いくさのこと多く書きる源平時代にも、さやうのこころあるまじく…」

と弁明したので桂月らはますます立腹し、論争というより鉄幹・晶子を責めなじり、結局鉄幹は弁護士をつれて桂月を訪ねて、妻の舌足らずを陳謝します。

反戦思想か感傷か…戦争の最中に見せた文人魂

戦後、反戦平和運動が盛んになり、晶子のこの詩はふたたび問題になりました。ある者は反戦思想のさきがけだとほめ、ある者は単なる女性の感傷にすぎぬとたたきますが、昭和35年（1960）佐藤春夫（詩人・小説家）は、こんな主旨を述べています。

「無論乱心賊子ではないが、反戦・平和主義でもない。ただやたらと天皇をかつぎだして言論を圧迫した権力者や、軍部に対する反発はあったろう。晶子には明治天皇逝去を悲しむ歌、飛行機事故死の木村中尉を嘆く歌などもあり、反戦主義者だったとはとうてい思えぬ」

しかし私は、春夫は戦後の言論自由の時代だから、こんな気楽なことが言えたのだと思います。あの日露戦争の最中にこんな詩を詠む晶子の文人魂はすばらしい。畏敬すべき女性です。

蛇足を加えます。詩に出る新妻は「せい」と言い当時17歳、お腹に赤ちゃんがいました。何度も書いたように、籌三郎は鳳家で唯一の姉の理解者で、父の眼を盗んで鉄幹との交際に力を貸した弟です。2年前に父宗七は死亡、老母を助けて生家の菓子商「駿河屋」の経営に当たった大黒柱です。これらの事情も念頭に置いて、「君死に給ふこと勿れ」を鑑賞すべきでしょう。

君死にたまふこと と勿れ

（旅順口包囲軍の中に在る弟を歎きて）

与謝野晶子

あゝをとうとよ君を泣く
君死にたまふことなかれ
末に生れし君なれば
親のなさけはまさりしも
親は刃をにぎらせて
人を殺せとをしへしや
人を殺して死ねよとて
二十四までをそだてしや

堺の街のあきびとの
旊家をほこるあるじにて
親の名を繼ぐ君なれば
君死にたまふことなかれ
旅順の城はほろぶとも
ほろびずとても何事か
君知るべきやあきびとの
家のおきてに無かりけり

君死にたまふことなかれ
すめらみことは戰ひに
おほみづからは出でますね
かたみに人の血を流し
獸の道に死ねよとは
死ぬるを人のほまれとは
大みこゝろの深ければ
もとよりいかで思されむ

あゝをとうとよ戰ひに
君死にたまふことなかれ
すぎにし秋を父ぎみに
おくれたまへる母ぎみは
なげきの中にいたましく
わが子を召され家を守り
安しと聞ける大御代も
母のしら髮はまさりけり

暖簾のかげに伏して泣く
あえかにわかき新妻を
君わするるや思へるや
十月も添はでわかれたる
少女ごころを思ひみよ
この世ひとりの君ならで
あゝまた誰をたのむべき
君死にたまふことなかれ

「明星」明治37年9月号に掲載された「君死にたまふこと勿れ」

「明星」明治33(1900)年4月～明治41(1908)年11月（復刻版、臨川書店刊）

資料提供：堺市立文化館 与謝野晶子文芸館
大阪府堺市堺区田出井町1の2の200 ベルマージュ堺弐番館
☎072-222-5533 JR阪和線「堺市」駅から徒歩約3分

おおさか昔さがし 305

文 三善 貞司（地域史研究者）

※切り絵の塩入みや子さんは、体調不良によりしばらくお休みされます。

おおさか人物百科 (157)

与謝野晶子 ⑩

明治38年（1905）晶子26歳。1月、晶子は日本女子大学学生山川登美子と、登美子の同級生増田雅子の3人で、合同歌集『恋衣』刊行、明星女流歌人のロマンの結晶だと高く評価されます。登美子については連載⑥で紹介しましたから、今回は雅子にふれておきます。

晶子、登美子と並ぶロマン歌人家を捨て結婚、「スバル」に参画

彼女は同13年大阪の道修町の薬種問屋「増田商店」の主人増田宇兵衛の次女に生まれました。本名まさ。母さとが早く死亡したため相愛女学校を中退させられ、主婦がわりを務めますが、投稿した短歌を与謝野鉄幹が認め、「明星」の同人になります。同37年父の猛反対を押し切って日本女子大学国文科に入学、ここで登美子を知り、登美子の紹介で晶子とも親しくつきあいました。

『恋衣』には「みをつくし」と題して、

白梅の衣にかをると見しまでよ君とは言はじ春の夜の夢

はじめ114首を掲載。晶子・登美子とは甲乙つけ難い濃艶な恋歌だと評価されますが、大学当局は女学生のくせに恋歌とはけしからぬと登美子とともに、停学処分にしています。そんな時代でした。

同40年大学を卒業するころ、明星同人の茅野蕭々に求愛されます。雅子は27歳、婚期おくれを心配していた父ですが、結婚は絶対許さめと気色ばみます。彼が3歳年下であること、まだ東京帝国大学学生で生活能力がないことなどが理由です。しかし蕭々の親友安倍能成（後の学習院総長・文部大臣）が、彼は死ぬ覚悟で恋をしたと語ったほどの熱情に負けた雅子は、家を捨て結婚を選びます。

翌年赤ん坊が生まれ、蕭々は第三高等学校（現・京大）でドイツ文学を教授。やがて夫妻は北原白秋・吉井勇らと「スバル」を創刊、詩歌・小説・翻訳と本格的文学活動を始めました。

母校の教授に就任し童話、随筆と、活動を広げる

大正6年（1917）蕭々は慶応大学教授に招かれ、ふたたび一家は東京に戻り、雅子は岩波書店から歌集『金沙集』を刊行します。

十七や難波は古き中船場すだれの奥に琴弾きにけり

張り抜きの虎など吊るし薬草の匂ひしめらる大阪の家

むづがりて張子の虎の耳を引く子のつぶら眼に柔かき風

などの短歌に、父に叱られとびだした故郷大阪への愛着と郷愁が、ひしひしと感じられます。

同10年彼女は母校日本女子大学教授に就任。「春草会」「茅花会」等の文芸サークルも指導、新聞・雑誌にエッセイや童話を寄稿するなど活動範囲を広げます。夫の蕭々もドイツ留学を経て独文学の権威者となり『ファウスト物語』『リルケ詩抄』『令嬢ユリエ』『若きヴェルテルの悩み』等の名訳を次々に発表、また『ギョエテ研究』『現代文芸思潮』といった本格的なライフワークにもとりくみました。

2人の夫婦仲は友人もうらやむほどです。

「妻としても母としても最高の女性だが、学問文芸の伴侶として、まさに掌中の珠を得たような気分である」

蕭々はこうのろけています。「ゲーテではない。ギョーテが正しい」と言い張って、学者たちと論争した堅物の男がです。

昭和20年（1946）空襲で被災した夫婦は、日本女子大の寮に仮寓しますが、極端な食糧不足で栄養失調になり衰弱、翌21年8月蕭々は63歳で死亡、わずかその5日後に雅子も急死しました。夫の葬式のおりはまだ元気だったので、「あんなに仲の良かった二人やさかい、ひとりやったら淋しいやろと雅子はん、きっとついて行ったんや」と、大阪の親類たちまでうわさします。

女学生のくせに恋歌などけしからぬ、ふしだらな女だと非難された女流歌人の生涯は、こうでした。

さて話を晶子と鉄幹にもどします。順風満帆だった「明星」が、光を失いはじめたのです。

堺 晶子を歩く

晶子は東京に住む鉄幹の元へ走るまでの23年間を、堺で過ごしました。古代より集落を形成し、近世からは貿易による経済力を元に自由都市として発展した堺。彼女はこの街で、先進の気概と豊かな文化を糧に成長しました。秋の1日、晶子の面影をたずねて歴史とロマンの街を歩いてみませんか？

南海本線堺駅西口広場
海の方を向いて立つ晶子の像。台座に彫られた歌は、「ふるさとの潮の遠音のわが胸にひびくをおぼゆ初夏の雲（明治38年『明星』）」

徒歩10分

晶子の生家近くにある**山之口商店街**。堺市内で最も古い時期に形成され、かつては大阪難波の心斎橋と並び称された。晶子の詩歌が書かれた40枚の垂れ幕が、通りを飾っている。

徒歩3分

開口（あぐち）神社
社伝によると、創建は神功皇后の時代にまで遡り、地元では「大寺さん」と呼ばれて親しまれている。晶子も祭事の折々に立ち寄ったことだろう。

江戸末期に作られた手水舎に置かれている手水桶にある十字の印。江戸初期に禁制になるまで堺はキリシタンの多いまちだったことから、隠れキリシタンと関係があるのでは…という人も。

▲大人の背丈よりも大きく立派な狛犬。子連れなのが珍しい。「吽」形の方は、手に玉を乗せた姿。江戸末期の漁業関係者の寄進で、当時の堺港の繁栄ぶりが伺える。

徒歩5分

甲斐町西の**生家跡**。説明板の左隣に歌碑がある。「海こひし潮の遠鳴りかぞへつつ少女となりし父母の家（明治38年『恋衣』）。こちら側は裏口にあたり、道路をはさんで反対側の歩道あたりが生家の正面だった。

阪堺電車「宿院」乗車「神明町」下車　徒歩5分

晶子と鉄幹を引き合わせた河野鉄南氏が住職だった**覚応寺**。界隈は寺が立ち並び、昔当時の風情が色濃く残る。境内の歌碑は「その子はたちくしにながるるくろかみのおごりの春のうつくしきかな（明治34年『みだれ髪』）。毎年、命日の5月29日「白桜忌」が催される。

「右そてつ　左ふじ」
妙国寺近くの粋な道標。建立（嘉永五年）は、ペリー来航の前年。

阪堺電車「妙国寺前」乗車「浜寺公園」下車

南海本線浜寺公園駅
1907年に立てられた駅舎（設計：辰野金吾）は国の登録有形文化財。明治33年8月、浜寺の寿命館で開かれた歌会で、晶子と鉄幹は初めて顔を会わせた。

右は**浜寺公園**にある歌碑「ふるさとの和泉の山をきはやかに浮けし海より朝風ぞ吹く（大正8年）」。

おおさか昔さがし 306

文　三善　貞司（地域史研究者）

※切り絵の塩入みや子さんは、しばらくお休みされます。